

室の木チャペルとパイプオルガン

短大のチャペルは、故 林淳三学長が「建学のシンボル」として「建てねばならない」と願ったもので、献堂式は1987(S62)年3月31日、披露は4月11日に行われました。建物は5号館とされ1、2階が教室、3階以上が座席数626席を持つチャペルで、4階席後方には円形のステンドグラスが配置されています。チャペル完成後は入学式、卒業式が学科を分けて午前・午後で挙行され、また毎週の礼拝と講演会や演奏会、短大行事が開催されました。



パイプオルガンは西ドイツ(当時)のゲオルグ・ヤン社製で、彼のオルガン製作所による日本向け第1号でした。チャペル正面中央に据えられ、高さ9.5m、重量7.5t、パイプ数2,459本、3段手鍵盤とペダル、33ストップを有し、当時は珍しかった鍵盤の真上にスパニッシュ・トランペット(水平トランペット)やツインベルシュテルン(回転式ベル)も組み入れられています。

当時の価格は7,000万円で、関東学院百周年記念の短大募金に香葉会は500万円を寄付、そのほかに後援会会員・短大教職員全員・卒業生個人・学生父兄からのものを含め寄付金は約7,000万円に達しこれがそのままパイプオルガンの購入に充てられました。1989(H元)年5月にドイツのオルガン技師により組み立てが開始され、7月3日に引き渡され、11月5日にはジグモンド・サットマリー氏によるパイプオルガン演奏会で披露されました。(短大と香葉会の協賛)

※短大卒業生の中にもオルガニストとして活躍している方が数名いらっしゃいます。



<参考記事>

旧香葉No16-P2

旧香葉No18-P24「母校ニュース」

「室の木礼拝堂パイプオルガンについて」ニュース・レターNo19-P22~23